

待降節第二主日

2014.12.7

マルコ 1・1-8

今日待降節第二主日の福音は、マルコ福音書の冒頭のことばから始まっています。このことにはどのような意味があるのでしょうか。わたしたちを取り巻く日々の暮らしは今年も12月を迎え、気分的にもあわただしさを増しています。そんな生活の中にあるわたしたちに、今日の福音は、もう一度始めに戻って、わたしたちが信仰によって受け入れた、神の子イエス・キリストの福音をじっくりと味わうように呼びかけているかのようです。

「イエス・キリストの福音の初め」というマルコ福音書の冒頭の一節は、日々の暮らしに追われているわたしたちに強烈な一撃を見舞う力強さに満ちています。

お前たちは何を信じて生きているのか。何を信じてこの一年の暮らしを生きてきたのか。マルコ福音書の冒頭の一節を待降節の福音として聴くとき、そのように問われているように感じます。わたしたちの信仰は、神の子イエス・キリストによってもたらされた福音を信じ、受け入れることから始まったはずで、「神の子イエス・キリストの初め」というマルコ福音書の出だしのことばは、わたしたちの信仰の出発点に立ち戻るようにと、呼びかけているようにも思えます。毎年クリスマスを祝うのは、この世の生活を生きるわたしたちの中に来てくださった神の子イエス・キリストに、わたしたちの心を向け直すためです。そのためにも、わたしたちは初めに戻らなければならないのです。

「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」という預言者のことばは、待降節のこの時期、特別な響きをもってわたしたちの心に迫ってきます。主の道は、わたしたちが信じた神の子イエス・キリストをわたしたちの中に迎えるための道です。そしてその道は、「わたしはいつもあなたがたとともにいる」と言ってくれる、神の子イエス・キリストに従って歩み出すべき主の道です。日々の煩雑な生活の中に身を置きながらも、待降節のこの時期、神の子イエス・キリストを信じた者としての心の道筋だけは、まっすぐに整え直したいと思います。

神の子イエス・キリストが、わたしたちのうちにまっすぐに整えてくださったはずの道筋が、わたしたちの中で迷路のようになってしまい、その道筋を見失ってしまうとすれば、それはわたしたちの罪の結果です。そのような生き方によって、わたしたちは、わたしたちが信じた神の子イエス・キリストがわたしたちのうちに開いてくださった道からそれて、再びあらぬ方向にさまよい出

てしまいます。そのような罪を悔い改めるとは、神の子イエス・キリストがわたしたちのうちに開いてくださったまっすぐな信仰の道に立ち戻るといことです。洗礼者ヨハネの姿を通して、今日の福音がわたしたちに訴えているのは、そのような悔い改めです。

神などいない。神がいるならどうしてこのようなことが起こるのか。神に祈っていても、何も始まらないではないか。このような声が津波のようにわたしたちの心を襲う時勢の中にあって、わたしたちが復旧すべきは、神の子イエス・キリストがその福音によってわたしたちのうちに開いてくださった、それでも神を信じるまっすぐな信仰の道です。そのためにも、わたしたちはイエス・キリストの福音の初めに戻って、神の子イエス・キリストがわたしたちにもたらしてくださった福音とはどのようなものだったのかを学び直さなければなりません。

神などいない。神がいるとしても、神はこの世に生きるわたしたちの中で、この世を生きるわたしたちのために何もしてはくれない。そのような声の満ち満ちているわたしたちの世界の中に、神はその御子イエス・キリストを遣わしてくださった。これが、わたしたちが受け入れた神の子イエス・キリストの福音ではなかったのでしょうか。神がいるならどうしてこのようなことが起こるのかという神への抗議の声に答えて、神はその御子をこの世界に遣わしてくださったのです。神の子イエス・キリストは、この世のわたしたちの生活の中に来られて、これ以上に神のみ前で無垢ではありえない生涯を生き抜かれ、十字架の上に犠牲となって死んで行かれたのです。これが、御子をわたしたちの世界に遣わされることによって、神がわたしたちに与えてくださった応えです。何故罪もない多くの人々がこのような悲劇に巻き込まれて犠牲とならねばならないのかという、今の世に生きるわたしたちが神に向ける抗議に対する神の応えです。

罪もない多くの人々の痛ましい死を目の前にして、わたしたちは自分たちが生きるいのちの尊さを、何ものによっても覆い隠されてはならない、いのちの尊さを悟ったはずです。けれども、わたしたちの中に打建てられた十字架から、わたしたちの心にまっすぐに届いていた主の道は、今どうなっているのでしょうか。十字架がなかったかのように生きるということが罪なのです。十字架の悲惨な犠牲が、わたしたちに啓示した何事にも換えがたい一人ひとりの人のいのちの尊さが、テレビを通して繰り返されるキャッチフレーズとなって、日々の生活を生きる私たちの上を素通りして行ってしまうとするなら、わたしたちの日々は十字架とは無関係になってしまいます。

わたしたちが信じた神の子イエス・キリストは、神などいないとうそぶくこ

の世の傲慢な支配の力の下敷きにされて苦しむ、弱い立場におかれた人々のいのちの大切さを啓示しています。そのために、神の子イエス・キリストは、自らもこの世の支配者たちの不当な裁きを受けて十字架の上に死んでくださったのです。その神の子イエス・キリストを、わたしたちのこの世界に遣わしてくださった父なる神は、それだけの犠牲を払って、この世界に対するご自分の愛の絆は決して断たれていないことをわたしたちに啓示してくださったのです。これが、わたしたちが信じ、受け入れた神の子イエス・キリストによってわたしたちにもたらされた福音です。

洗礼者ヨハネは、彼の後から来られる神の子イエス・キリストの道を整えるために悔い改めの洗礼を授けました。「わたしの後から来られるその方は、聖霊によってあなたがたに洗礼を授けくださる」と洗礼者ヨハネは人々に語ったのでした。

わたしたちが受けた洗礼は、ヨハネが告げた聖霊による洗礼であったはずですが。けれども、わたしたちが、神の子イエス・キリストがわたしたちのうちに開いてくださった主の道を見失うとき、わたしたちが受けた洗礼は、わたしたちにとって単なる儀式としての水の洗礼に戻ってしまいかねません。

待降節のこの時期、もう一度、神の子イエス・キリストの福音の初めに戻って、洗礼を受けることによって主イエス・キリストとともに歩み始めた、わたしたちの信仰の道を見つめ直し、新たな心をもって歩みはじめたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高